

# 狐とまれびと

朔月京物の怪語り

沙藤 堇

Sumire Sato

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくするには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

序章

7

狐の章

狐のはなし 一

15

一 登花楼

21

狐のはなし 二

40

二 来客

46

狐のはなし 三

85

三 常春

100

狐のはなし 四

130



## 月の章

伊織のはなし 一

141

一 春時雨

147

伊織のはなし 二

170

二 月黄泉

177

伊織のはなし 三

211

三 名前

225

終章

243

あとがき

250



挿画  
旭炬

狐とまれびと

朔月京物の怪語り



## 序章



凍てついた北風が、雪を冠した寒椿の花弁を揺らして吹き抜けていった。

朝日が凍り付いた沢に降り注ぎ、年輪のように刻まれた氷紋を輝かせている。滑らかな氷面鏡は、橋の袂に並んだ子供達をくつきり映していた。

粗末な衣を着た子供達は、大きな柳行李を背負い、藁靴を履いた娘を、じっと見詰めている。

「それじゃあ、お姉ちゃん行つて来るからね！」  
 絶るような目をした弟妹達に、結は精一杯明るく微笑んで見せた。

今年の夏は短く寒く、小さな山里はたちまち飢饉に襲われた。弟妹達を売るか飢えて死ぬかの二択を迫られる程生活が逼迫し、長女の結が出稼ぎに出る

事となつたのだ。疫や戦の多いご時世、珍しくも無い話である。

結は、一人一人の顔をゆっくり見回し、嚙んで含めるように告げた。

「もうすぐ、父上からの届け荷がある筈だからね。今年の正月はそれで過ごすんだよ。もしかしたら、お飾りが入っているかも知れないから、皆できちんと年神様をおもてなしして差し上げる事！」

結のすぐ下の妹、千歳が無言で頷いた。その拍子に、吊り目がちの瞳から大粒の涙が転がり落ちる。彼女は微かに口を開いたが、しゃくりあげる声が漏れただけで、言葉にはならなかった。

朝を告げる山鳥の囀りだけが、辺りに響く。

「お姉ちゃんが居ない間は、千歳と維の言う事をよく聞いてね。困ったら、里の皆が助けてくれるから、何かしてもらったらお礼をちゃんと言うんだよ。皆仲良く、元気にやっていてくれれば、私は安心して働いていられるからね」

ね、と首を傾<sup>かし</sup>げてても、幼<sup>おきな</sup>い弟妹は頷<sup>うなづ</sup>く事を厭<sup>いと</sup>つて目を伏せてしまふ。

結は小さく息を吐いた。悲しみと諦<sup>あきら</sup>めをかき混ぜたかのごとき細い息に、ゆっくりと維が顔を上げた。

「……いつてらつしやい。姉さん」

声は掠<sup>かす</sup>れ一晚中泣いていたかのように軋<sup>きし</sup>んでいたが、それでも目元を微<sup>かす</sup>かに和<sup>やわ</sup>らげ、口角を上げる。

嘘<sup>うそ</sup>と強<sup>つよ</sup>がりにまみれた笑顔だったが、姉を安心させようという長男の矜<sup>きやう</sup>持<sup>じ</sup>が溢<sup>あふ</sup>れた、誇り高い笑みだった。頷いて、結は背筋を伸<sup>の</sup>ばす。

「それじゃあ、本当に、いつて来ます。奉公先<sup>ほうこうさき</sup>に着いたら、なるべく早く手紙を書くからね」

街道へと足を向けようとした利那<sup>れいな</sup>、次男の雅<sup>まさ</sup>が喉<sup>のど</sup>も張り裂けんばかりに泣き出した。

「嫌だ、いやだいやだ！ 行かないで！」

彼はがむしゃらに駆け出すと、結の膝<sup>ひざ</sup>に縋<sup>ひき</sup>りついた。

「明日にしよう!? もう一日だけ、一緒に居て！」

ねえ、嫌だよ、結姉さん！ 行かないでよ！」

雅は、一番の甘えん坊であり、末の弟である東<sup>とう</sup>にすら、しょっちゅう泣かされている弱虫だ。

生来の気の弱さゆえに、結に一番抱きしめてもらっていた弟だった。彼は嫌だ、行かないで結姉さんと泣き叫び、無駄<sup>むだ</sup>と分かりきっただをこねる。

それは、必死で姉を安心させようと、苦心して不格好に微笑んだ維の努力を踏<sup>ふ</sup>みにじる涙だった。

けれど、一家が助かるにはこれしか無いと、理性で諦めようとした兄姉の心をそのまま吐き出した叫びでもあった。

泣く事を己<sup>おのれ</sup>に許さなかった兄や姉の代わりのように、雅は身もだえして泣いた。

「行かないで、行かないで！ 寒くてもいいから！ 着物も、お布団もいらなから！ 結姉さんが居な

い方が、ずっとずっと寒いから！」

生き延びる為に、布団も着物も、限界まで売ってしまつてからは、熾火<sup>おきび</sup>のぬくもりが残る囲炉裏<sup>いろり</sup>はた

の灰が、彼らの寢床だった。

小鳥のように身を寄せ合つて、兄は弟を、姉は妹をかき抱き、寒さに齒を打ち鳴らしながら、浅い眠りに落ちる日々が、数えるのも飽きる程に続いていた。それでも雅は、涙をふり飛ばして喉を哽らす。

「何にもいらないから！ 皆一緒なら、なんにもいらなから！」

どんなに腹を空かせていたとしても、晴れ着の一枚、触れた事さえ無かつたとしても、不幸では無かつたのだと。

その泣き声は、確かに聞く者の心を揺さぶり、足を踏み出しかけた姉の心を引き留めた。

しかし同時に、幼い感情にまかせてぶつける身勝手は、他の兄弟を冷静にした。雅のひとつ年下の弟、東が、きつとまなじりを吊り上げて兄をひっぺがす。「お前だけが辛いと思つてるんじゃないよ！」

東は両手両足をばたつかせる兄を意に介さず、両肩を摑んで真正面から睨み付けた。

「さ、最後まで、結姉、困らせたいのかよ！」

本来、一番結を困らせていたのは、このきかん気の末っ子だった。

蛇を捕つて来ては籠の中に閉じ込めたり、鷹を捕まえて飼うんだと言つて里山に入り、結局迷子になつてこつぴどく叱られたりと、起こした面倒事は枚挙にいとまが無い。

甘え上手な雅と違って、素直に構つて欲しいと言えない性分だった上、兄姉は何かと忙しく働いていた為、気を引こうとして随分騒動を起こしていた。

たとえ拳骨と共に叱つても、その場限りに謝つて走り出し、一刻後にはまた新しい問題を引き起こす悪戯っ子、それが東であつた。

だからこそ、分別をわきまえたその物言いが胸を突いた。引き結んだ唇と、両手の震えを感じて、雅が黙り込む。

長男が視線で、さあ、今、と合図を送っている。頷いた結は、大きく息を吸うと、一步、二歩と静

かに後ずさった。三步目で素早く踵を返して、脇目も振らずに走り出す。

古い橋の板が軋む。柳行李が弾み、乾いた音を立てた。どこかで枝が折れたのか、垂り雪の音が響く。それに重なるようにして、悲痛な泣き声が結の耳を打った。

「待って！ 待って、なあ、結姉！」

甘えん坊で泣き虫の、雅の声では無かった。

それは、ついさつき、大人びた事を言つて兄をいさめた、東の声であつた。

「いいこにするから！ いいこにするからああ！」

何年も聞いていない、赤ん坊が己の全霊を賭して、泣き叫ぶような声だった。

躊躇えば、二度と走れなくなると分かっていたから、結は振り返らなかつた。

心優しい雅が、あの寂しがり<sup>さび</sup>の末っ子を抱きしめてくれるだろうと信じて、前を見続けた。

つづら折りの下り坂を、どれ程走つた事だろう。

一際急な角を曲がつた時、視界を遮つていた木立が途切れ、美しく折り重なる山並みが現れた。

高く聳える山峰<sup>さんぼう</sup>が、頭から雪を被つて輝き、薄い雲が、青い山肌を擦るように流れている。

結はゆつくり足を止めると、左の袖で汗を拭つた。千切れそうに冷たかつた耳が急に熱くなる。冬の寒さはとうに追い出され、薄く汗が滲む程に温かい。

この先は、崖<sup>がけ</sup>にへばりつくように伸びた山道を、踏み外さぬように進まなければならぬ。

喉の奥に血の味を感じながら、長々と白い息を吐いた。

一度だけ振り返ると、冬枯れの木々が立ち並ぶ斜面に、今まで駆け降りて来た道と、曲がりくねりながら流れる谷川が見えた。

家族が住む里は、もう山の反対側に隠れて影も形も無い。結は背筋を伸ばして前を見ると、雪を踏みしめて歩き出した。

静かだった。

遠くから、谷川の水が流れ落ちる音がする以外、何も聞こえない。

弟妹の引き留める声も嗚咽も、ここには届かない。必死に唇を噛みしめていた結の目元に、涙が盛り上がった。両手で頬を叩き、顔を仰向けたが、溢れ出る雫は遠慮など忘れたように滲んでいく。

うつむいて、手の甲で目元を擦る。薄汚れた頬を伝って、熱い涙が黒ずみながら落ちていく。

その一時だけ、結は、己に泣く事を許した。

たった一度だけと心に誓って、どうにもならない寂しさをさげすむ事を許した。

首を逸らし、荒い息を整えぬまま、ひくりとしやくり上げて。

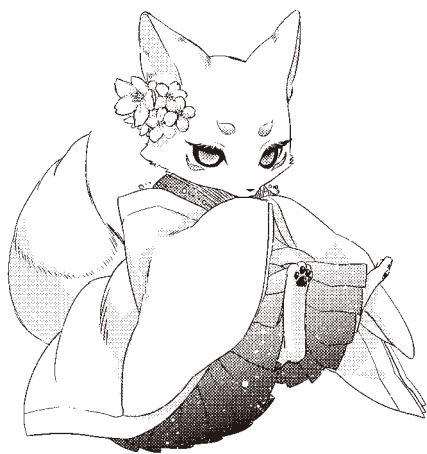
けれども、なお、足は止めずに。

——お母さん！

冬らしい薄水色の空に、結の泣きじゃくる声が吸い込まれていった。



狐  
の  
章





## 狐のはなし 一

鼻先を空へ向けると、雲の流れが速いのが分かった。分厚い千切れ雲が、お天道様の前を通り過ぎるたび、辺りは明るくなったり暗くなったりする。

すん、と鼻を鳴らした春時雨は、その冷たさと匂いで、もうすぐ雨が降るんだと気が付いた。

稲穂の海は去りがたいけれど、濡れるのは好きじや無いから、とつとと巢穴に帰らなければならぬ。雁の群れが綺麗な線を描いて飛んでいく。彼らも巢に戻るのだ。ふさふさした尾を振って首を戻すと、春時雨は二本の後ろ足でしゃんと立ち上がった。

「白兄様、雨が降るのよ。もう帰るのよ」

神の使いたる狐は、衣を纏い、口をさく。

図体ばかりでかい長男が、畦に転がってぐうすか昼寝をしているから、末の妹は横っ腹に狙いを定め、げしげしと足蹴にしてやった。

「かーえーるーのーよー」

何度か拍子をつけて踏んでみたけれど、白南風は真つ黒い鼻をぴくぴくさせて、んあ、と間拔けな呻り声を上げただけだった。喉元の白い毛皮は、気持ちよさそうに大きく上下している。

「夜兄様、白兄様が起きないのよ」

ため息をついて言いつけようとしたら、次男の姿が無い事に気が付いた。さっきまで、すぐ傍で毛繕いをしていた筈なのに。

兄を探して金色の田んぼに降りると、自分の背丈よりも高い稲穂を掻き分ける。風に乗って漂って来る臭いを追えば、見慣れた背中と尻尾は、すぐに見付かった。

何故かくるんと丸まって、毛皮の塊みたいになっている。頭だけ稲の向こう側に出して、何かを熱心に見詰めているのだ。

「何見てるのよ」

つい興味をそそられて、隣から同じように顔を出

すと、沢山の人間が大きな船に乗って川を下っているのが見えた。

山のような荷物を積んだ船の周りには、無数の木材が浮かんでいて、櫂を持った使用人が乗っている。一際大きな屋形船には、怖い顔をして刀を持った男が何人も立っていた。

船の尻尾にあたる部分は、色糸が飾られた赤い絹に覆われて、目隠しされている。その中から鮮やかな裳裾がはみ出ているのが見えて、春時雨は興奮気味に霜夜の袖を引つ張った。

「夜兄様。あれ、お姫様なのよ。綺麗なの、綺麗なよ。ねえ、あの人達、いつもは屋敷に籠もっているのに、どうしてこんな所にいるの？」

霜夜は神経質そうに細い髭をそよがせると妹を一瞥し、すぐに視線を川の上に戻してしまった。

「都遷し。今の都を捨てて、新しい土地に都を造りに行くんだよ。船の周りを流れてるあれは、屋敷を木材に戻して作った筏なんだよねえ」

教えたがりの兄は、自分の知識をひけらかすのが大好きだ。訊ねれば、そつけない態度のわりに、聞いている事までえんえん喋ってくれる。

「滝矢浄盛は、清河院も安寧天皇も連れて、お膝元の幸原に移って新しい都を築くつもりだよ。よっぽど、陽ノ下の一族が邪魔なんだねえ。やつぱり、藤川で負けたのが痛かったのかねえ」

春時雨は大きな目をぱちぱちさせて、耳を伏せたり立てたりした。

「みつつの言葉にまとめると？」

「偉い人が、皆を連れて、お引越し、だねえ」なるほど、と頷いた春時雨は、ちよつと考えてから小首を傾げて尻尾を振った。

「ねえ、竜田姫様も、お引越しされるのよね？」竜田姫様は、狐の三兄弟が仕える秋の女神様だ。

山の紅葉を真っ赤に染めて、澄んだ風を吹かせてくれる偉大な御方。白露の簪をさして、蘇芳の反物を織っている。

優しい手をしていて、とても良い匂いがするので、春時雨は竜田姫様が大好きだ。

「私、あの綺麗な行列に入りたいのよ。新しい都も見たいのよ。ねえ、夜兄様、私も行きたいのよ」

素晴らしい主の女神様が、あの行列に加わらない訳が無いと信じ切つて言つたけれど、霜夜は氣に入らなそうに顔を歪めてしまった。

「無理に決まつてるよお。主様は、お山そのものだからねえ。御神氣を榊の枝に分けて、小さな竜田姫様を連れていくんじゃないかねえ」

神様は、挿し枝みたいに増えてゆく。神事を行つて新たに生まれた竜田姫様の分身は、竜田姫様だけど、春時雨達の主様では無い。

「じゃあ、私達は行けないの？」

「主様を置いて僕らだけ行く道理は無いよねえ？」

霜夜の声は、自分に言い聞かせているようだった。途端に春時雨は悲しくなつて、首を横に振りながら、一生懸命、兄の袖を引っ張つた。

「やだやだ、嫌なのよ！ 春時雨もお船に乗るのよ！ あのお姫様みたいにやるのよ！」

「だったらお前、一匹で勝手に行けよお！ 僕は主様の傍を離れたりしないからな！」

鬱陶しそうに突き放されて、ますます春時雨は悲しくなつた。

嫌なの、嫌なのよと地団駄を踏んだのに、しゃつと苛立たしげに呻られてしまつて、とうとう大きな声を張り上げて泣き出した。

「何だ！ お前ら、また喧嘩してるのか！」

春時雨の泣き声を聞きつけて、さっきまでぐつすり寝ていた白南風が現れた。

音を立てて稲穂を搔き分け、のしのし歩いて来た兄を見付けて、春時雨は温かい大きなお腹に抱きつきめそめそ泣いた。

「白兄様！ 夜兄様が、い、意地悪を言うのよ！」  
「春時雨、都合が悪くなるといつつも白兄さんに言いつけるから、嫌なんだよねえ」

根性悪、と陰気で棘のある声で付け足されて、春時雨はべえつと舌を出した。聞こえよがしに嫌味を言つて来る霜夜の方が、よっぽど根性が悪い。

「喧嘩は両成敗だ！ 忘れろ！」

凄まじく大雑把な裁き方をして、白南風は霜夜の隣へどさりと腰を下ろし、あぐらをかいた。春時雨と同じように、霜夜が何を見ているのか確かめて、だけど妹と違つてすぐに興味を無くしてしまつた。

「何だ！ 霜夜、あんな物を見て面白いのか！」

「気に入らないから見てるんだよお」

「不愉快なら見なければいいではないか！」

がしがし掻き回されるのを嫌がつて、霜夜は頭を振り立ち上がった。毛並みを整え、甲高い声で叫ぶ。

「何で白兄さんは平気なんだよお!! あいつら、あんなに竜田姫様を頼つておいてさあ！ 新しい姫様を作つたら、古い方はあつさり捨てるんだよお!!」

その時一瞬だけ、雲が割れて夕陽が現れたから、目が眩んで霜夜の顔は真つ黒に見えた。

紅の光で出来た板のような水面には、兄と同じく影絵になった船が、数えるのも面倒な程に溢れていた。船の金具や錦がびかびか輝いて、あちこちに小さな夕陽が落ちて来たようだ。

対岸の稲穂の海と相まつて、その船の行列はうんと綺麗に見えた。

けれど、人間達があまりにも淀みなく流れていくものだから、春時雨にはひどく遠い光景に思えたのだつた。

船に乗つて去つていく人間の群れを見て、何だか春時雨は妙に白けた気持ちになつてしまつた。

あつと言う間に再び曇つて、暗さを取り戻した川面を眺め、ふうん、と鼻を鳴らす。

「捨てていくの……」

春時雨達の愛する、この望月京を。

浅はかな人間達に馬鹿にされたように感じて、髭をそよがせる。

何だか、急に興味が無くなつてしまつた。あんな

に綺麗に見えた行列が、今はもうつまらない鴨<sup>かも</sup>の群れに見える。

「じゃあ、もういいのよ。いらないの。ほら、兄様達、さっさと帰るのよ」

さつきまで、地団駄踏んで付いていくと言っていた妹が、急に聞き分けが良くなったので、霜夜は変な顔をした。

けれど、また面倒な事を言い出されるのが嫌だったのか、文句を言う代わりに話を変えた。

「帰る前に『常春<sup>とこはる</sup>』に寄っていきたいんだよねえ。昨日、佐保姫<sup>さほひめ</sup>様から花の種をもらったんだよ」

佐保姫様は、竜田姫様の妹で、春の女神様だ。

この前白南風が偶然見付けた、あの世とこの世の境目のような不思議な場所を、霜夜は殊<sup>こと</sup>の外<sup>ほか</sup>氣に入っている。

常春と名付けて、せっせと花を植えたり、大きな桜の木を整えたりと楽しそうなのだ。

「それなら私も行きたいのよ。ねえ、花を植えるの

なら、ついでに、あの一番大きな桜の木の下に、私が舞う為の舞台を造って欲しいのよ」

可愛<sup>かわい</sup>くおねだりして見せたのに、霜夜は全然心を動かされないばかりか、面倒がつてぱっと逃げ出してしまった。

「そんなの、白兄さんにやらせろよお」

どうせ力だけはある余ってるんだから、と一言余計な事を言ったので、霜夜は「なんだと！」と声を荒らげた白南風の体当たりで吹っ飛ばされた。

畦道の上まで転がった霜夜は、何度か跳ねてから止まると、むきになって白南風の耳に噛みついた。

「おう、何だ！ やるのか！」

妙に嬉<sup>うれ</sup>しげな白南風が、力任せに霜夜をはじき飛ばして、前足で背中のにし掛かる。

「馬鹿やってないで、帰るのよー」

ひとつの塊みたいになって、稲穂の中でごろごろ転がりながらじゃれあっている兄達を、春時雨<sup>あき</sup>が呆れながら追い抜いた。

けれど勢い余った二匹は、転がりながら彼女の背中に突っ込んでいく。

ふいをつかれた一番小さな末の妹は、案の定、軽々と跳ね飛ばされてしまった。

「何するのよー！」

きやんと一声鳴いた春時雨が、素早く起き上がって二匹に飛びかかる。

喧嘩相手が増えて「うはは、来い来い！」と喜んでいる白南風の笑い声と、「わざとじゃないんだよねえ！」という霜夜の弁明が、曇った空に響く。

やがてぽつぽつと雨が降って来たので、稲田でじやれていた狐達は、慌てて三匹一緒に駆けていったのだった。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF  
形式で、作成されています。この続きは  
書店にてお求めの上、お楽しみください。